岐阜県多治見市における社会教育施設の特性を活かした多世代交流と学校運営協議会を通じた地域連携
―多治見市根本交流センターと小泉公民館における実践―

桑原真紀[1)]・益川浩一[2)]

[1)]公益財団法人多治見市文化振興事業団　小泉公民館（〒507-0073 岐阜県多治見市小泉町 8-80）

[2)]岐阜大学地域協学センター（〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸 1-1）

1. 多治見市における公民館と社会教育福祉

岐阜県多治見市北西部にある根本町。市立公民館がないこの地域に公民館建設の話が動き出したのは、今から 30 年以上前の話である。地域住民、地域発展のために拠点となる公民館が必要だとの気運が高まり、その想いが形になるまで 20 年余り。その間に時代は少しずつ変化し、人口減少、少子高齢化が加速し、公共施設の在り方も見直されるようになってきた。その中で平成 25 年 4 月に公民館と児童センターが併設された複合施設「多治見市根本交流センター」が誕生する。

公民館は、市町村その他一定区域内の住民のために、実際生活に即する教育、学術及び文化に関する各種の事業を行い、もつて住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することを目的とする施設である（社会教育法第 20 条）。児童センターは、地域において児童に健全な遊びを与えて、その健康を増進し、又は情操をゆたかにすることを目的とする児童福祉施設である（児童福祉法第 40 条）。

社会教育と福祉を融合した領域である「社会教育福祉」[1)]の先駆けとなった複合施設の先進事例として、多治見市根本交流センターの特徴を活かした交流事業を紹介する。

2. 施設の特性を活かすために

2-1.「交流センター」スタイルの確立

多治見市根本交流センター（写真 1）

多治見市根本交流センターはユニークな施設で、入口玄関はひとつにも関わらず、公民館（年末年始休み）と日曜祝日休みの児童センターが共存する。２階建ての施設内で部分的に分かれているのである。1 階にある大ホール（遊戯室）は時間帯によって名称、使用目的が異なるのも特徴的である。市役所の担当課も文化スポーツ課、子ども支援課と二本立てである。多治見市根本交流センターの設置管理条例には、運営の基本として「複合施設の有機的連携」が定められた。それを実現するために試行錯誤しながら事業が推進されてきたが、時代に後押しをされた新しい形が地域住民に愛される施設に定着するまでには少々時間が必要であった。

指定管理者である（公財）多治見市文化振興事業団が運営を担い、公民館でもなく児童センターでもない交流センターを創り上げるために、両者の垣根を低く、風通しをよくすることで、誰にでも親しんでもらえる明るい雰囲気づくりが目指された。

まずは地域性を理解すること、この施設を待ち望んだ住民の想い、この施設の活用法を見極めることが重要で、交流センター周辺は長閑な田園風景が広がるも、ローカル線の駅やショッピングセンターがあり、ある程度の人の動きがある地域であり、お祭り好きの気質があり高齢者のボランティア活動が活発であるが、拠点となる場所がない問題を抱えていた。近くの幼稚園、小学校は中規模校である。新たな移住定住者の見込みは少なく、乳幼児親子の利用は単発的なものだろうというのが開館当初の見解であった。

利用者を迎えるにあたりいちばんに心がけたことは、「平等」ということである。子どもも大人も一緒の利用ルールとし、公民館利用者も児童センター利用者も利用時間以外は共通のルールでシンプルにわかりやすくする。これがはじめに設定した交流センタースタイルである。

運用をスタートすると、子ども達が溢れかえり、乳幼児親子が市内全域から集まり、見込みを上回る利用者数となった。そこで「複合施設」の可能性がますます広がっていくことを実感し、ブラッシュアップさせていく必要性が感じられた。

はじめに掲げた交流センタースタイルは、シンプルな運営と利用者との関係づくりの原点となり、そこに独自のカラーを重ねていくことで「ねもとらしさ」という言葉が生み出された。新しいことにチャレンジする姿勢や、創造力を膨らませて今までにない価値や魅力を作り出すことに力が注がれた。

2-2. 複合施設のメリット

趣味、健康、学習などのサークル活動に加え、地域課題、ニーズ・時代に合った講座、ボランティア活動などは、“つどう・まなぶ・むすぶ”といった観点で公民館活動として推進された。そこに福祉の要素も加わり、交流センタースタイルとして生涯学習活動が展開されてきた。
複合施設化のメリットとしては、以下のような点が挙げられる。

① 地域の拠点施設（シンボル的役割）
② 利用幅の拡大（共生社会、複数の利用目的）
③ 経費削減（設備等の共用利用）
④ 多世代交流、地域交流を通した居場所づくり・生きがいづくり
⑤ 総合的なサービスの提供（一元化）

多世代交流しやすい条件として、多くの人が集まる場所（空間）があること、きっかけとなる講座・イベントの充実、そして地域住民の協力が不可欠である。根本交流センターには、人が集まるには十分なスペースがあり、また施設周辺には豊かな自然がある。そこで、米作り（田植え、青田刈り、稲刈り、もちつき大会、しめ縄づくり）、さつまいも作り（苗植え、いもほり）、ゴーヤで緑のカーテン作りが地域住民主体で実施されてきた。さらに地域内にあるお寺で座禅会、神社を拠点にした歩こう会など多世代で参加できるイベントが次々に展開された。地域資源を活用することを目的に始めたイベントで多世代交流の舞台が整ってきたのである。

3. 多世代交流事例

3-1. 将棋のひろば

公民館主催の「子ども将棋教室」を夏休みに開催した。この企画は愛知県瀬戸市を中心に全国的な将棋ブームの最中に実施したもので、たくさんの小学生が参加した。講師から将棋のルールを学び、遊ぶことができるようになり、目的は容易に達成することができた。子ども達の将棋熱は熱く、もっと将棋をできる場を、もっと強い相手と対局したいという声が生まれ出した。

土曜日の午前中に活動している地域住民の将棋サークルに注目をし、子ども達も参加させてほしいとアプーローチし、快く受け入れていただき、子ども達が将棋を楽しむことができる場所が見つかった。

しかし、同じ部屋に将棋好きな大人と子どもがいるのに、一向に交流が進まない。大人は大人と、子どもは子ども・・・そのような光景ばかり。子ども達が教えてくださいと頼んでも、「もっと上手くなってからな、もっと大きくなったらやってやる。」という受け答えで、子ども達のやる気は低下する一方であった。これでは将棋熱が冷めてしまうと、なんとかしたい交流センタースタッフは次のようなことを考えた。将棋サークルの方を対象に子どもとの関わり方を学ぶ機会を設けたのである。大人の役割は子どもの気持ちを受け止めること、子どものやる気を引き出すこと、子どもとともに楽しむことを共有事項とした。しかし、家族以外の子どもとの付き合いがない大人は、どうしたらよいのだろうと迷うばかりであった。子どもとの距離を近づけるために挨拶をしたり、自己紹介をしたりと色々なことを試みようとしたが、やはり大好きな将棋をきっかけに話をするのがいちばんだということになり、次第に大人の気づきが子どもたちの将棋熱を呼び戻し、学ぶこと、教えることの喜びが得られる「将棋のひろば」に生まれかわっていった。

将棋のひろば（写真 2）

3-2. 根本フォーラム実行委員会の活動から見る子どもとの関わり方

平均年齢 75 歳、男性 10 名で結成されたボランティア団体「根本フォーラム実行委員会」がある。地域住民との語り合いの場「ねもと茶論（サロン）」、地域を再発見する「ねもとめぐり」、後世へ伝える「ねもとの昔ばなし」、地域との交流「パネルディスカッション～いいとこやでここは」など、充実したボランティア活動が行われている。

その中から「ねもとの昔ばなし」紙芝居づくりのエピソードを紹介する。

子どもたちに親しんでもらえるよう民話を紙芝居に作り替え、残していこうという取組みである。特にこだわって作った部分は会話形式を多く取り入れたこと、地元の言葉（根本弁）を使っ

たことである。

作品が出来上がり子どもたちへ披露することになったが、そこで受けた子どもたちからの反応は厳しいものであった。「面白くない」「何を言っているのかわからない」「怖い」・・・など。根本フォーラムのメンバーは上出来だと思っていただけにショックは大きく、自分たちがよかれと思っても伝わらないと意味がないということを受け止めた。

ねもとの昔ばなし（写真 3）

そこで地元の古い言葉に親しんでもらうために「多治見弁かるた大会」や子どもたちと日常会話をする中で、おじいちゃんの言葉に慣れ親しんでもらう機会を増やした。

そんな矢先に新型コロナウイルス感染症がまん延し、至近距離に集まり楽しむ紙芝居ができなくなってしまった。ならばと、大型スクリーンに映し出し動きのある紙芝居にリニューアルしてコロナ禍でも楽しめる形にバージョンアップがなされた。

自治会活動などによくあるように例年どおりにと変化を好まない体質が根付いている中、この根本フォーラムは子ども達の反応を見て、子どもたちに喜んでもらえる形を模索し、瞬時に変化させていくところがきわめて素晴らしいところである。ただ子どもたちに喜んでもらいたいという想いがメンバーを突き動かしているのである。この紙芝居は子どもだけでなく町内会やサロンでも披露され、地域全体に喜んでもらえるものとなった。派遣依頼や貸出希望の声が上がるほどで、根本フォーラム実行委員会のメンバーの活躍が根本交流センター以外にも広がった。

ねもと茶論（サロン）
（写真 4）

ねもとめぐり（写真 5）

パネルディスカッション
（写真 6）

3-3. ワクドキタイム・ワクドキカーニバルを通した地域交流、異学年交流

小学生の夏休みお楽しみ企画として 15 時からの「ワクドキタイム」がある。集団あそびを楽しむというだけで当日のプログラムは未定である。集まったメンバーで何をするかを考えるところからあそびは始まる。そのあそびの中で育まれるのは、体力増進、リーダー育成、安全意識の向上、協調性、仲間づくりなど無限にあると考えられる。

ワクドキタイムが定着し、「ワクドキカーニバル」という特別イベントが企画された。夏休み期間中に 1 度だけ、館内に設置された 3 つのプログラムをグループで巡る大型イベントである。3 つのブース運営は地域ボランティアが担い、自然・環境コーナー「プラネタリウムを楽しもう」、食のコーナー「クイズ＆手作りおやつを楽しもう」、あそびのコーナー「軽スポーツ　フラバルーンであそぼう」がある。「学び」×「食」×「遊び」の枠組みでプログラムを提供し、子ども達に大人気の企画であったが、ボランティアと子ども達の間でトラブルが発生した事例を紹介する。

手作りおやつにどんな野菜を使っているかを試食して当てるコーナーがあった。そこでボランティアが工夫を凝らしたおやつが子どもたちの口に合わず不評だったのである。ある子どもの一言が連鎖的に広がり、一瞬にして会場内の雰囲気が変わった。ボランティアも子ども達の相手は不慣れで、そのような状況を受けて子どもたちに背を向けてしまった。作ることに精一杯で子どもたちの相手をする余裕がなかったと反省会で発言されていた方も、もう来年からは協力できないと自信をなくしてしまう程であった。

このように多世代交流がうまくいかなかった例はいくつもある。互いの気持ちに寄り添い、思いやりの気持ちがないと交流は成り立たない。この経験を通して、子ども達との関わり方、叱り方などをテーマにした講習会を企画したり、大人と子どもたちが一緒に学ぶことができる機会を

増やした。自然をテーマにした鳥の観察会や防災関連などはどの世代にも興味を持ってもらうことができ、一緒に考え一緒に学び合うことができた。

ボランティア団体の撤退でワクドキカーニバルの存続が難しくなっていた際に、嬉しい声が届いた。以前参加していた子が中学生になり、自分たちに運営を任せてほしいと申し出てきたのである。今までは中学校へボランティア派遣を依頼する形であったが、この時に中学生自主ボランティア隊「ねもとプレジャー☆スター」が誕生した。

ワクドキカーニバルの運営スタッフは変わったが、子どもたちの思い出になるようなイベントにするために異なる 3 つのプログラムを考え、満足度の高いイベントを提供し続けることができた。小学生と中学生の交流はとても自然で、お互いに生き生きとした姿が印象的であった。

プラネタリウムを楽しもう
（写真 7）

食に関するクイズコーナー
（写真 8）

フラバルーンであそぼう
（写真 9）

3-4.「こんぺいとうハーモニーズ」（合唱クラブ）の結成からステージ発表まで

当時流行っていた映画の主題歌をみんなで歌いたいと言い出した児童センターであそぶ 2 人の子どもがいた。その言葉を形にしたいと考え、「Let it go を歌おう！」という合唱講座が開催された。幼児から小学生を対象としていたが、保護者の参加、指揮者、伴奏者も名乗り出て合唱クラブのような形になった。みんなでひとつの曲が歌えるようになり目的を達成した頃に「もっと活動を続けていきたい！」という声がどこからともなく上がり始めた。可愛らしい子ども達のキラキラした眼差しを見て「こんぺいとうハーモニーズ」と命名し、クラブ活動をスタートさせた。自主運営の形で好きな歌を歌い、振り付けを考え、衣装を作るようになり、発表の機会も増えていった。

こんぺいとうハーモニーズ
クリスマス会にて（写真 10）

こんぺいとうハーモニーズの活躍は、地域のアイドル的存在へと成長していった。最も注目すべきところは保護者の活躍である。「大人が楽しんでいるから子どもも楽しい」「このグループを見ると元気が出る、楽しくなる」という目指すべき姿がそこにあった。これを先駆けに「親子ダンスクラブ」が発足し、新たな親子クラブが始動した。

さらに、こんぺいとうハーモニーズの活躍を紹介する。

根本交流センター5 年目の話であるが、「音もと（ねもと）de 歌おう」という記念イベントを企画した。音楽を通して地域交流をしたいと考え、公民館代表混声合唱クラブ「ひだまりコーラス」、地域代表おやじバンド「吾林寿（ありんす）」、児童センター代表「こんぺいとうハーモニーズ」の 3 団体が出演した。

このイベントの目玉はコラボ企画である。昭和の懐かしい名曲をおやじバンドの演奏に合わせて小学生が歌ったり、アイドル歌手が歌う連続テレビ小説の主題歌を全員で歌ったり、会場内は大熱唱となった。

このイベントを振り返ると、歌の力、合唱の素晴らしさはもちろんであるが、子どもたちの歌声と笑顔に誰もが魅了させられた。子ども達を中心に音楽を通じて心を通わせ、根本交流センターらしい 5 周年記念イベントとなった。

図表 1　記念イベントチラシ

公　民　館　×　地　域　×　児童センター

混声合唱クラブ
ひだまりコーラス（写真 11）

おやじバンド吾林寿（ありんす）
（写真 12）

こんぺいとうハーモニーズ
（写真 13）

3-5. 小学生ボランティアと地域イベント

根本交流センターで活動している小学生ボランティアは、次のとおり 3 ステップ方式である。

STEP1　このゆびと～まれ
STEP2　ねもとボランティア☆キッズ
STEP3　ねもとレインボー☆キッズ

図表 2　小学生ボランティアのステップ

はじめてのボランティア活動「このゆびと～まれ」は、花の苗植え、清掃活動など単発のボランティア活動で、ボランティア活動の入口である。地域貢献を目的にしている。「ありがとう」の言葉をいただき、満足感を得ることで、次の活動へとつなげていく。

「このゆびと～まれ」でボランティアの楽しさを体験した子どもたちが、次のステップとして「ねもとボランティア☆キッズ」へ活動の場を広げていく。登録制で年間を通した活動を行う。地域イベントのお手伝いが主な活動である。地域ボランティアの方々や仲間との交流を目的にしている。特に根本校区青少年まちづくり市民会議との連携を行い、地域の中で育っていく。

さらに「ねもとレインボー☆キッズ」がある。色分けしたグループがいくつもあり、それぞれイベントに結びつけられ、イベントの企画、運営を行う。

例えば、チームレッドはクリスマス会を盛り上げる。チームグリーンはウォーキング事業を企画運営する。子ども達の自由な発想、マンネリ化しないイベント、話し合いを重ね、チームワークでイベントを盛り上げる。その結果、次の世代の憧れ的存在となり、大型イベントには欠かせない存在になっている。

また子ども達の活躍の影には、地域ボランティアの方々の支えがある。地域で子どもを育てるという想いをもって、場所の提供、見守り、アイディアの尊重、子どもの良さを引き出すこと、イベントが安全に開催できるようにハード面かつソフト面の支援も行う。

安心してボランティア活動をすることが活動の継続を支え、活動者の生きがいづくり・支えあいが豊かなまちづくりを後押しする。

ボランティア交流会
（写真 14）

みんなで歩こう会
（写真 15）

ねもとあったかクリスマス会
（写真 16）

4. 多治見市立小泉公民館における学校運営協議会との連携

4-1. 多治見市立小泉小学校学校運営協議会の発足

多治見市立小泉小学校
（写真 17）

小泉小学校は、令和 3 年に児童 679 名を新校舎に迎えた。「なかよく　かしこく　たくましく」を学校の教育目標に掲げ、仲間と力を合わせて生活する子、進んで学習する子、目標に向かって粘り強く取り組む子を目指す児童の姿としている。

令和 3 年 10 月に、学校運営協議会が多治見市教育委員会により設置され、授業支援や地域とのつながりを深める「ふるさと学習」等が開始された。運営協議会の役割として、①学習支援、②安心安全の支援、③地域交流促進支援の 3 つの支援部会を組織している。

周辺には戸建ての住宅が増え、新校舎建替 1 年後の令和 4 年 4 月には児童数が 725 名に増加し、今後も人口増加傾向が続き、地域と共にある学校づくり（地教行法第 47 条の 5）が必然となっていくことが予想される。

4-2. 小泉公民館活性化委員会と小泉小学校との連携

町探検での解説（写真 18）

令和 4 年度に小泉公民館と小泉小学校の連携がスタートした。公民館は学校運営協議会学習支援部会事業（3 年生を対象にした「大原たんけん」）に参画し、校外学習を全面的にサポートした。子どもたちが地元を巡り、公民館活性化委員会（公民館活動の活性化、地域でのコミュニティ活動の推進及び支援を行う公民館に設置された地域住民の会）のメンバーがボランティアとして遺跡・名所で解説をする。地元で生まれ育った「人」から聞く話であるから、リアルである。

以前は教員が解説ポイントで説明をしていたが、その役割を地域ボランティアが担う形にした。安全に実施できるよう、町の見回りや下準備も任された。教員の負担は減り、ボランティアの活躍の機会が増えた。

町探検当日は、町内に設置した 5 カ所のポイントでボランティアの語り部達が解説をし、子ども達は一言も聞き逃さないよう耳を傾けメモを取った。

ふれあいバザー（写真 19）

また、小泉小学校 PTA 主催のバザーが 3 年ぶりに開催された。新たに地域交流、多世代交流を目的に取り入れ「ふれあいバザー」という形になった。ふれあいバザーでは、ワークショップコーナー、宮太鼓、ダンス、吹奏楽部の発表などを充実させ、コロナ禍でもできる地域イベントを実現させた。公民館は活性化委員会が中心となりワークショップブースを担当した。

開催が決定してから、当日を迎えるまで約 2 か月であったが、PTA 役員の保護者とともに準備を進めた。前例のないイベントへの挑戦でもあった。

学校運営協議会がスタートし、地域交流、多世代交流を意図的に創造する機会が増えている。近年、小泉地区は若い世代の移住者が増加し、子ども、核家族が増加している。一方で子ども会活動、町内会活動などの地域活動、地域交流は減少している。そこで、学校と地域との連携が大切になってくる。子どもを育てる環境を充実させるために、マンパワーは必要不可欠である。登下校時の見守り隊、地域の安全管理、環境整備などは地域住民だからこそできることがある。特に高齢者の活動については、豊富な経験に加え、時間的余裕があり柔軟に対応できる強みがある。そこで、キーマンとも言えるコーディネート役は重要な存在である。学校を中心に子どもやボランティアともつながりがある「ひと」が望ましい。

小泉小学校において「地域と共にある学校づくり」が軌道に乗り、安定かつ持続可能な取組が推進されていくよう、対話を重ねていく必要がある。

4-3. 小泉公民館活性化委員会の課題

小泉公民館活性化委員会は、20 年以上前から年に 2 回ずつ地域探訪ウォーキングを実施してきた。令和 3 年には、過去に歩いたコースを網羅したウォーキングマップを作成した。地域につい

て知識、経験も豊富である。しかし、この度小泉小学校と連携をし、町探検で小学生向けに遺跡の解説をすることが決まると、予想以上に緊張し、子ども達との交流を不安に思うメンバーがいた。今まで大人を対象に解説をしてきたからである。学校運営協議会の取組を理解できていない方、地域で子どもを育てるなんて無理だという方、10 名のメンバーから次々とネガティブな言葉が出てきた。

はじめてのことを行う時に不安はつきもの、不安を解消するために念入りの準備をしようと公民館職員から呼びかけがなされた。また、すべての不安要素を挙げてもらい、話し合いや説明を重ね、不安や問題の取り除きが行われた。学校運営協議会の組織図を見るだけでは理解できないが、地域で子ども達を育てたいという願いがありこの会が結成されていること、地域コミュニティの大切さを伝えていくことが公民館の役割としてあること、学校をサポートしながら交流を図ることができることなど、活性化委員会のメンバーたちに目的が伝わり、目標がみえたことでようやくスタートラインに立つことができた。

このように共通認識を持つまでに「対話」は欠かせない。その「対話」に苦手意識をもっている人が多い。そのことが課題の一つではないかと考えられる。

例えば、地域全体を見ると、自治会の各委員会の研修はどれも内部研修にとどまり、地域住民との関わりがほとんどない。自治会役員は毎年変わるので、研修を受ける人が増えることは喜ばしいことではあるが、単年度限りの話で終わってしまう。このような形では、変化させることも難しい。例年通り滞りなく実施することが、大切に思われてしまうからである。

小泉公民館活性化委員会の話に戻るが、自治会同様、例年通りに事業を進めること自体が喜びとなってしまっていたため、コロナ禍になった途端、活動が停滞してしまった。変化を求められた時にこそ「対話」が必要となるが、コーディネート役を担う存在が現れなかったことが要因である。これが二つ目の課題である。地域全体を見ることができ、未来を見据えた展望を持つ「ひと」（人材）の発掘は急務である。

4-4. 子どもたちとともに学ぶ

小泉小学校 3 年生「町探検」のまとめの会に、小泉公民館活性化委員会が招待をされ参観した。子どもたちは紙芝居、ペープサート、寸劇、大型スクリーンなどを使って調べ学習を発表した。グループごとに発表形式は異なり、自由な発想と学習力、プレゼン力に驚かされた。

しっかり聞き学んだ子どもたちに自分達の解説が伝わった喜び、学ぶことの楽しさを活性化委員会のメンバーも気づきはじめた。

町探検の反省会で、次にどうしようかと活性化委員から前向きな発言が出てきた。一方的な解説ではなく、対話形式になるようクイズを取り入れたい、言葉だけではなく写真なども活用して説明したいとアイディアが湧いてきた。子どもたちの学びをよりよいものにするために、大人たちが考えだしたのである。

学校運営協議会の活動の中で、子ども達を地域で育てるということへの理解が得られた。「地元をもっと好きになってほしい、子どもたちに伝えたいことがある。」と想いを持つことで、自然と子どもたちに寄り添った言葉かけができるようになっていった。

学ぶのは子どもだけではない。地域の大人たちが子どもたちの成長を願い、地域の未来を考えることが目指すべき方向である。子どもたちのために話し合い、相談することの大切さ、時代やニーズに合わせて変化をさせていくことを躊躇してはならない。子ども達のエネルギーやパワーを活用し、刺激をもらいながら、学校との連携を進めていくことでよりよいまちづくり、地域活性化が推進されていく。

紙芝居での発表（写真 20）

ペープサートで発表（写真 21）

モニターを活用した発表（写真 22）

令和 5 年度からは、隣接する小泉中学校でも学校運営協議会がスタートする。ここでは、学校課題であるクラブ活動の推進と地域課題である防災、ボランティア活動を中学校が拠点となり解決を図っていくことになる。地域の協力を得ながら部会を立ち上げ、話し合う。子どもの意見が反映されるように、委員に子どもを置くことが検討されている。子どもを真ん中に置き、学校から生まれた好循環が地域へ広がるイメージがもたれている。学校との連携は未来を見据えた地域づくりである。交流を通して、人が育つまちづくりを目指していくことが重要である。

5. まとめ

以上、本稿では、岐阜県多治見市の根本交流センター及び小泉公民館を事例として、社会教育（公民館）における福祉分野との連携を通じた多世代交流と学校運営協議会を通じた地域連携について考究した。

周知のとおり、令和元年 12 月に閣議決定された第２期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」[2)]では、「地方創生を担う『ひとづくり』のための多様な主体の連携」が必要であるとされ、特に社会教育・公民館には、「多様な主体」と連携した地域の人材の育成・活用を行う取組の促進が求められた。遡って、平成 30 年 12 月に取り纏められた中央教育審議会答申「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について」[3)]においても、人口減少、少子高齢化、つながりの希薄化、地方財政の悪化等、多様化・複雑化する課題と社会の変化に鑑みて、個人の成長と地域社会の発展の双方に重要な意義と役割をもつ社会教育に、「学びと活動の循環」を通した人づくり、つながりづくり、地域づくりを推進していくことが求められ、新たな社会教育の方向性として、住民の主体的な参加のためのきっかけづくりやネットワーク型行政の実質化等を通じた「開かれ、つながる社会教育」の実現が求められている。かつて、小林文人は、「単独の公民館」が「単体」で、それぞれ独立して役割を果たすという短絡的な発想から脱する必要性を提起し、自治体内外の公民館相互のネットワーク形成、図書館・博物館・青少年教育施設、福祉施設等との連携・協力による総合的な体制づくり、学校との提携と役割分担の必要性を説いた[4)]。

今、社会教育・公民館には、まさに、福祉分野や学校等の「多様な主体との連携」と他分野・領域に（と）「開かれ、つながる」ことが求められているといえる。

注）

１）松田武雄編著『社会教育福祉の諸相と課題』大学教育出版、2015 年。

２）第２期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」（令和元年 12 月に閣議決定）を参照。

３）中央教育審議会答申「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について」を参照。

４）小林文人「国際的視野からみる公民館の課題と可能性」、小林文人・佐藤一子編著『世界の社会教育施設と公民館』エイデル研究所、2001 年、pp. 488-493。